

Title	英語感情名詞メタファーの系譜 第1回 序 及び fear (The Oxford English Dictionary 引用例を資料として)
Author(s)	渡辺, 秀樹
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2018, 2017, p. 1-18
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69957
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

英語感情名詞のメタファーの系譜

第1回 序 及び **fear** (*The Oxford English Dictionary* 引用例を資料として)¹

渡辺秀樹

キーワード

fear、反義語、感情語、固定表現、逆順不可対句、擬人化、動物表象、四大、複合感情
(fear, antonyms, emotions, EFI (English Fixed Expression), irreversible binominals, personification, zoomorphism, four elements, blends of emotion)

1 基本感情の分類と数についての概観

以下では筆者が実際に論文・著書を読んだ文献での扱いのみを要約し、後節で行なう *The Oxford English Dictionary* 第2版と第3版の用例分析論考の参考とする。

Darwin の進化論の立場から、人間全てに共通の基本的感情とそれを表す顔の表情があると主張するのが Paul Ekman である。Ekman とその共同研究者の考えでは、異なる文化に生まれ育った者が学習して身につける諸感情に加えて、文化を超えて人に共通する 6 個の基本感情があるとする。すなわち **surprise, fear, anger, sad, disgust, happy** で、このうち **surprise** と **fear**、**sad** と **disgust** を示す顔の表情の類似から、この二組は古くは同じ感情から人間の進化の過程で分化したと考える。この 6 個説の影響は強く、心理学者のみならず言語学的に感情語を研究する者にも大きな影響を与えてきた。² しかし Ekman で私が注目したいのは、彼らの研究グループが 6 種の感情とそれに対応する顔の表情の実験に関してなした下の言及である。

Our experience suggests that people typically experience **blends of emotion**. If subjects are asked to imagine fear they are likely to generate fear blended with surprise, of fear blended with distress... Our studies of self-report and expression when subjects watch films of accidents, surgery or mutilation, found that more than one emotion was typically elicited. Fear, disgust, distress, surprise often occurred within the same subject, often in rapid sequence, merging one on top of another.
(Ekman 1984: 325 強調は筆者)

私たち自身が日常感じているように、例えば、世話をしていた後輩や学生に背かれたり疎遠にされたりした時は、怒りと共に悲しみを感じるだろうし、その理由がわからないまま、または判明して、軽蔑と嫌悪の混じった感情へと変化したりする。この今仮に**複合感情 (blends of emotion)** と名付ける現象は今後、本稿に続く論考で **fear** の類似感情の分析で用いる。

Ekman に代表される 6 個説に対して 8 個説を唱えるのは精神医学者でもある Robert Plutchik で、彼は色彩のスペクトルにヒントを得て、対立項 (primary dyads³) を重視し、連続円環する 4 組 8 個を設定した。

surprise	anger	joy	acceptance
anticipation	fear	sadness	disgust

Ekman の 6 個中にないのは **anticipation** と **acceptance** で、この 2 つを基本感情群に入れることに驚き、反対する人もいるだろう。が、Plutchik はそれぞれの感情の強度のスケールから立体モデルを同時に提唱しており、最強度になった場合のこれら 8 個は **amazement, terror, rage, loathing, grief, ecstasy, vigilance, adoration** に至る。次図参照。

¹ 本論文は平成 29 年度 科学研究費補助金 基盤研究 (C) 研究代表者 大森文子「英語メタファーの認知詩学」の研究分担者および平成 29 年度 科学研究費補助金 基盤研究 (C) 研究代表者 渡辺秀樹「英詩メタファーの歴史と構造」の成果の一部である。なお *The Oxford English Dictionary* の用例に添えた [] は、その用例が置かれた見出し語を指す。

² Dylan Evans, 2001. *Emotion*. pp. 3-10.

³ Robert Plutchik, 1984, p. 206.

極点	rage	amazement	terror	grief	loathing	ecstasy	adoration	vigilance
基本感情	anger	surprise	fear	sadness	disgust	joy	acceptance	anticipation
Ekman	anger	surprise	fear	sad	disgust	happy	-----	-----

筆者は語彙意味論の立場から、2つの隣接する基本感情から構成される中間的な感情として joy と acceptance の間に love、fear と surprise の間に awe、surprise と sadness の間に disappointment を措定する行き方に賛成する。これは上で述べた Ekman に見える blends of emotion と通じ、本節の終わりに述べる九鬼周造「情緒の系譜」の行き方とも符合するからだ。

ただし、実際の8つの基本感情の表示は円を8分割した図でなされており、その8個中でお互いに類似する感情が隣接しているわけではなく、諸感情が光のスペクトルのごとく連環するような印象を与えている点に批判が集まる。さらには研究の過程で徐々に組み合わせを変更してきている。例えば集大成的な *Emotions and Life* (2002) において、その表紙に以下のような構造を円環図で提示し、各感情の強弱のスケール、反義関係、隣接感情によって生ずる混合感情を示したが、以前の acceptance は地位が一つ下がり、その場所は trust が占めている。

強	ecstasy	admiration	terror	amazement	grief	loathing	rage	vigilance
中	joy	trust	fear	surprise	sadness	disgust	anger	anticipation
弱	serenity	acceptance	apprehension	distraction	pensiveness	boredom	annoyance	interest

加えて、本文の Structural Model 説明部では admiration が adoration に (p. 104)、anticipation は expectation (p. 110) となっており、こうした変化は Plutchik を基に議論する時の混乱を引き起こすだろう。Plutchik は言語学的に感情を研究しているのではないので、語自体ではなく感情の内容を示しているのだが、この種の不統一は以下に述べる Wierzbicka の批判するところである。

認知言語学の分野では Zoltán Kövesces の一連の感情論の影響力が強く、所謂 <ANGER IS HEATED LIQUID IN CONTAINER> を出発点とする日本語や中国語、ドイツ語、ポーランド語などの「怒り」の分析論考が輩出、感情語研究の分野では「怒り」をテーマとする一分野が生じているとも言えよう。この Kövesces は anger, sadness, joy, fear, love の5つを基本的感情としている。

Speakers of a given language appear to feel that some of the emotion words are more basic than others. More basic ones include in English *anger, sadness, fear, joy, and love*. Less basic ones include *annoyance, wrath, rage, and indignation* for anger and *terror, fright, and horror* for fear. (*Metaphor and Emotion*. 2000: 3)

このようにloveを基本的感情(3-8個)中に入れているのは古くはWilliam James (fear, grief, love, rage)、Watson (fear, love, rage)、Parrotがいる。⁴ Angerとfear、joyとsadnessが反義語のペアを構成している様相の中でloveのみが対立項を持たないが、ではloveの反義語は何であろうか。そもそも反対感情があるのだろうか。こうした問いには、hateに決まっている、との大方の返答が聞こえる。歴史的語彙意味論の教科書とも言えるKay & Allanでもloveとhateを反義語(antonym)の例としてあげているが (love and hate may have no referents, but they are opposites of each other and both denote kinds of emotion (2015, p. 28)、これは英語話者の常識によっているのであり、証拠となるデータは示されていない。では主要感情に love が含まれるのに、何故 hate が含まれないのであろうか。これはこれからの用例収集と分類から再考察したい。

Kövescesは認知言語学的な視点から、感情を一つのカテゴリーとする時にその典型例(prototypical member)をangerとしているが、これにコーパス資料の分析結果から異論を唱えるのがOmori (2008, 2012) である。OmoriはBritish National Corpusから総称語emotionと代表的な感情語を含む“A of B”型の名詞句(感情語がBに起き、そのメタファー根源領域となる名詞がBに起きる)を抽出し、メタファーの根源領域を四大(水・空気・土地・火)の観点から四分類して、anger, fear, desireなどの感情名詞と総称語emotionが“A of B”型で起きた時に共起する根源領域を比較

⁴ Parrot, W., 2001. *Emotions in Social Psychology*. Psychology Press.

した。結果、水の領域が8割近く、他の領域はほぼ均等に (6.9%から9.8%) 残り2割強を構成するという総称語 *emotion* の比率に近いのは、*anxiety, relief, desire, pleasure*という周辺のと言えるような感情語であり、典型的な感情(語)と通常考えられている*anger, fear, sadness*などは、それぞれ、火の領域、空気の領域、土地の領域の語と共起する比率が高いこと、よって*anger*を始めから典型的感情語と見なすことへの注意、それぞれの感情語にはメタファー表現で共起する、そしてしない典型的領域があることを明示した(特に pp. 142-45)。

筆者は科研費を受けた3回の研究で12年に渡り大森とはお互いの共同研究者であり、Omori (2008, 2012) の基礎データの一つとなった*The Oxford English Dictionary* の感情語メタファー表現用例を収集分類した。この時のデータ抽出の検索式“A of B”とその用例は本研究の出発点である。

言語文化の相違を超えた人間が誰でも生得的に持つ基本的感情についての議論に疑問の目を向けるのは Wierzbicka である。彼女は感情の普遍性についての議論の大半が英語の感情語彙に基づき、かつ英語でなされていることで、こうした議論が英語の言語文化の影響下になされていること、それぞれの言語文化に特徴的で、他には見られないような感情を正確に理解することを妨げてきたと論じる。そして感情(語)の記述にはどの言語にも見られる基本概念(を表す英単語)のみを用いることで、類似している感情間の相違を明示することができるという。

Emotions proposed as universal, in the sense under discussion, must be identified in terms of a maximally language-independent semantic metalanguage, not in terms of the English folk taxonomy. (Wierzbicka 1986: 588)

そして対立項を重視する筆者の視点からは、日本人の感情語の研究で九鬼周造「情緒の系譜」が最重要だと考える。九鬼には「日本語の韻律」という日本の古今の詩歌の音韻分析分類の論文があるが、この「情緒の系譜」も「昭和万葉集」の2千余首を資料にしていることが、筆者の目指している英詩の感情語句の構造性とメタファーの系譜研究に大きな参考となるからだ。「情緒の系譜」で特に感銘を受けたのは、嬉と悲、愛と憎の二大対立項から派生される形で、親と厭、懐と悔、恩と怨が周辺関連感情群を構成していることだ。この構造は Plutchik の8基本感情とそれぞれの間属して双方の要素を持つ二次的感情群を想定する図式と相似形を成す。さらには、九鬼の諸感情の定義文には、20世紀初頭までの進化論を含む西洋哲学を修めた者による見逃せない説明がいくつかあるのだ。例えば、

「憎」の「にく」は「苦飽(にがあく)」の略であるという。悲しみを齎す対象に対して、我々は味覚的反撥を感ずるのである。

(「情緒の系譜」『「いき」の構造』岩波文庫 p. 146)

これには Ekman らに引き継がれている進化論的な原祖の感情 *disgust, hate* の捉え方、この感情が摂食行動に由来し、その感情の発現として、腐敗した食べ物や汚物の臭いと味を感じた時の「口目鼻を閉じて顔を顰める」表情と結びつくことと通じる。また次の言明は日本言語文化に特有と思われがちな「愛惜」についての達見である。

愛が愛惜として、愛するものの背後に、その消滅を予見する限り、愛は純粋な「嬉しい」感情ではなく、「悲しい」感情をも薬味として交えた一種の全体感情である。「愛し(かなし)」という全体感情の中に「悲し(かなし)」という部分感情が含まれている。

(「情緒の系譜」『「いき」の構造』岩波文庫 p. 149)

この複合感情としての「愛」の捉え方は、Wierzbicka がオーストラリア・アボリジニー言語に見える語 *Pintupi* が愛と悲しみの両方に似ている(“emotions (and to bodily results of emotions) akin to both sadness and love...which demonstrates a degree of love and concern for one’s kin and one’s land unparalleled in Western culture”)と説くのを読む時に、感情の普遍性と文化による相違について再考察を促すであろうし、上で述べた Plutchik の捉え方「愛は喜びと受容の混合感情」とも通じる。⁵

⁵ Wierzbicka. “Human Emotions: Universal or Culture-Specific?,” *American Anthropologist* (1986: 588).

2 語彙意味論 (Lexical Semantics) の方法論と対義語の判断方法

認知科学に特徴的なカテゴリーの考え方には、中心メンバーと周辺メンバーの存在を前提としているが、各カテゴリーの特徴的資質を全て備えている中心メンバーを表す語は短い語である。例えば *animal* というカテゴリーを考える時に真っ先に頭に浮かぶ語はペットの *cat*, *dog*、家畜の *horse*, *cow* などが普通であり、これらはほとんどが一音節語である。これに対し、本来の英語圏から離れた地域に住む動物 *elephant*, *giraffe*, *hippopotamus* など、所謂エクゾチックな動物名は多音節語である。感情語でも主要と見なされるものは一音節語か2音節語であって、この点から Plutchik の二つのペア *disgust vs. acceptance* と *surprise vs. anticipation* では、3音節語と5音節語で表される感情が（言語的に）基本であるための条件を満たしていない。

また、英語の感情語の議論では、同一研究者が同一論文中で *joy* と *happiness* を同じ「喜び」を表す語としてことわりなく言い換えて使用したり、第1節で述べた *sadness* と *distress* のように、研究者間で同じ感情を表す語が異なることがままある。同じような感情を表す類語であっても、連語や固定表現を成す共起しやすい語との組み合わせは、頭韻や発音しやすさなどによって相違が見られる。本研究においては、まず様々な連語の様式から個々の感情名詞 (*emotion words*) のメタファーの特徴を探り、次に類語の群の再考察から「恐怖」「喜び」「怒り」などの感情概念 (*emotion concepts*) のメタファーの特徴を示したい。

語彙意味論では、類語を考察する時には上位語と下位語、総称名と種類名を分ける。「恐怖」の意の名詞群では *fear* が一音節語で使用頻度も高く、*horror*, *terror* は恐怖の程度が激しい場合に用いられること、及び2音節語であることから、代表的な名詞は *fear* であると考えられる。これを図示すると下のように、類義代表であり概念としての FEAR の自己下位語が *fear* となるだろう。

FEAR
fright dread fear horror terror

4節以降での用例抽出方法であるが、筆者は大森文子氏と共同研究を行っており、英語の動物名と感情語というそれぞれのカテゴリーに属する語句のメタファーの構造的考察を続けている。大森は Alice Deignan (2005) の用いたメタファー表現抽出の検索式 “A of B” 型 (Bの部分にメタファーの *tenor* となる感情語、Aの部分に *vehicle* となる語が共起する名詞句) のメタファー表現を British National Corpus から抽出して、感情語毎にメタファーの根源領域となる語句を四大 (*four elements*) の水・空気・火・土の領域に分類した結果、総称語 *emotion* と近似のパターンを示すのは Kövesscses らの主張する *anger* ではなく、*desire*, *pleasure*, *anxiety* であることを示した (Omori (2008))。共同研究における筆者の担当は歴史的なメタファーの系譜考察であるので、その端緒として歴史的英語辞書 *The Oxford English Dictionary* をコーパスとし、その全引用例中から “A of B” 型の感情名詞メタファー表現を抽出し、各感情語の特徴的なメタファーの根源領域、各感情の類語名詞間での領域の相似と相違、メタファー表現や対句での使用例から見た感情語グループ内の反義と類義の構造を考察する。第1回の本稿では、パイロットスタディの後で名詞 *fear* の全用例 (約3000個) を点検する。

第1節では、心理学者・哲学者・精神医学者・言語学者の基本感情分類の相違を概観し、筆者は Plutchik と九鬼周造に典型的に見られる反義語のペアの存在を基軸とした分類方法を取り入れると述べた。反義語同士は、名詞も形容詞も動詞も一文中で対照的に用いられる傾向があり、等位接続詞 *and* か *or* で結ばれて並列することも多い事が知られている。この並列構造は反義語だけでなく類語の関係にも見られるが、これは英語の伝統的な文体なのである。⁶

共起語こそが当該語の意味を担うという考えはロンドン学派 Firth の有名な句で知られている。

“The general approach of a distributionalist method is summarized by John Rupert Firth’s famous dictum: ‘You shall know a word by the company it keeps’ (1957: 11). A similar assumption is expressed by the ‘distributional hypothesis’ as formulated by Harris (1954): words that occur in the same contexts tend to have similar meanings.” (Geeraerts, 2009:59)

⁶ 渡辺秀樹 1994. 「同意語並列構文の系譜」『英語青年』

本稿で共起語として“A of B”型に加えて抽出する感情語は、“A and/or B”型の等位構造に現れる感情名詞との並列語、感情名詞を限定する形容辞、感情語が主語の時の述語動詞・形容詞である。反義語・対義語の研究で近年顕著な業績を残しているSteve Jonesの方法も参考にする。Jonesは反義語が等位構造で共起する傾向を重視し、コーパスから形容詞の反義ペアを抽出するため、接続詞と前置詞を介して形容詞が並ぶ検索フレームを14個設定した (“* and Adj alike” “between * and Adj” “from * to Adj” など)。これらのフレームは名詞の反義ペア検索にも使用できる。⁷

3 恐怖の擬人化と動物比喩

筆者はこれまでに「恐怖の概念の擬人化」の視点から、古英語とルネッサンス期の英詩のメタファー表現を考察した経験があり、英語感情語の通史的なメタファーの考察の基点として、ここで最も古い古英詩と17世紀の英詩の状況を概観する。

Watanabe (1993) は現存古英詩約3万行に起きた「恐怖」の意味を持つ類語名詞の使用例を抽出して、それらの文脈を確かめ、その文体特徴を提示した論文である。現代英語で「恐怖」の意味の類語グループの代表となる語は *fear* であろうが、古英語期には名詞 *fær* は「突然起こる恐ろしい出来事・危険」の意味で、恐怖を引き起こす元の出来事を意味していた。中英語期には「驚愕・恐怖・心配」の意味に広く変化しており、これが現代英語の「恐怖」の意味に縮小変化したと言える。古英語期の「恐怖」を意味する代表的名詞は散文では *ege*、韻文では *egesa* であり、頭韻構成のために *broga*, *gryre*, *oga* などの類語とグループを成して、言い換えで用いられていた。

現代英語では感情が生じた時には人を主語とする構文を用いるが、中世英語では「感情が人に生じる」という所謂非人称構文で表したのであり、他の自然現象と同様に諸感情も「生じる」という意味の動詞 *standan* の主語になるのが普通であった。しかしこの動詞 *standan* は「立ち上がる、立っている」という人の動作や姿勢状態を意味する用法もあったため、下の3例のように「人の上に座り込み (*on ufan sæte* ‘sit upon’)」、「人を圧迫するように寄りかかる (*hleonaþ ofer* ‘lean over’)」と敵対者や襲撃者として擬人化されたのである (下線部は恐怖の意味の主語、斜字体部分が述語動詞である)。

(1) Hagedon aninga
hyra hlaforde hilde bodian,
ærðon ðe him se egesa *on ufan sæte*,
mægen Ebrea. (*Judith* 250b-3a)

(2) Ic on god min word georne herige,
and on god swylce georne gelyfe,
and ic ealne dæg ecne drihten
wordum weorðige; ne me wiht *an siteð*
egesan awiht æniges mannes. (*The Paris Psalter* 55. 9; 1-5)

(3) Swa þas woruldgestreon
on þa mæran god bimutad weorþað,
ðonne þæt gegyrnað þa þe him godes egsa
hleonaþ ofer heafdum. (*Guthlac* 70b-3a)

この動詞 *standan* は「音が生じる」という意味でも当然用いられたので、恐怖を感じた人のあがる悲鳴との結びつきから、「叫ぶ恐怖 (*gyllende gryre* ‘yelling horror’)」「恐怖が叫び声をあげる (*up astigan*)」のような擬人化表現や上昇の動きで示されたり、恐怖を「敵の投じた降りかかる矢玉」に喩えて、逆に降下の動きで示すこともあった。これは古英語の英雄詩の戦闘の場面に顕著な比喩表現であるが、旧約聖書詩編の古英語訳にも見られるため、ラテン語の言い回しの影響も受けているだろう (et formido mortis cecidit super me (Psalms 54. 4): and me *feallað on fyrhtu deaðes* (*The Paris Psalter* 54. 4. 2) 「死の恐怖が私に落ちかかってくる」)

⁷ Jones, Paradis, Murphy and Wilners (2007:134).

16 世紀から 17 世紀にかけて出版された多くのレトリック関係の書物は、古典レトリックに則った英語の書き言葉の解説書と詩語のリストや有名な詩句の抜粋集に大きく分けることもできる。後者の中で有名なものは *Englands Parnassus: or the choyssest flowers of our Moderne Poets, with their Poeticall comparisons.* (1600) で、これは 16 世紀の英国詩人の作品からの詩句の抜粋集で、いずれ資料として用いる予定である。ここで注目するのは Joshua Poole の *English Parnassus* (1657) で、英詩において主題となりうる概念を表す語をアルファベット順に並べて、歴代の詩人がその概念を描写するのに用いた形容詞表現を列挙した「詩語辞典」と言える。*Englands Parnassus* では抜粋詩句には出典の詩人名が付されているが、こちらにはそれはない。本書は三部構成を取り、第一部で押韻語のリスト、第二部で形容語のリスト、第三部で半行から数行の抜粋でフレーズを列挙する。その第二部で **fear** には以下の形容語が示される。

Jealous, sallow[sic], chilly, reverentiall, pale, shallow, trembling, low, presaging, chilling, lumpish, faint, prophetick, superstitious, ominous, wanny, heartless, guiltie, cold, sullen, **hovering**, anxious, suspitious[sic], bloodless, pressing, ignominious, unresolved, doubtful, distracted, imperious, degenerous, restraining, pulling, distempered, impulsive, wavering, boggy, **winged**, ghastly, suggesting, projecting, contriving, icie, **cloudy**, **muddy**, shuddering, shallow, restless, pale-hearted, cream-fac't, startling, wary, modest, blushing, impetuous, assaulting, palsied, paralytick, heart-amazing (p. 94)

この一覧では、当然恐怖を感じた人の顔色 (wanny, bloodless, pale-hearted, cream-fac't (蒼白), blushing) や動作 (trembling, faint, shuddering) およびそれと結びつく寒気 (chilly, chilling, cold, icie) を表す表現が多いが、興味深いのは **hovering** と **winged** で、恐怖の概念は一般的に擬人化される中に、鳥に喩えられる傾向も伺えることだ。これは第三部の抜粋詩句にも現れている。長いので一部だけ見ると、“A chi'l cold sweat/ Bath'd all my limbs. Drown'd in fear,/ With such a fear flies the air-piercing dove:/ A chilling fear surprizineth all his joynts. (p. 303)” と、寒気、冷気に加えて、溺死と飛翔する鳥のイメージが恐怖を表している。

Omori (2008) での根源領域の空気 (天候) や土地に属す **cloudy** と **muddy** が並んでいるのも示唆的である。歴史的な資料を電子コーパスで検索抽出する前には、同時代の書物での扱いを確認して、仮説を立てるのが有効だが、これまでの考察から次のような研究テーマと仮説が得られた。

- (i) 英語における **fear** の対義・反義概念・反義語は何か
- (ii) 恐怖の擬人化は英詩の通史的メタファーか
- (iii) 恐怖を表すメタファー根源領域としての「鳥」は詩的表現の伝統か、他の顕著な動物根源領域はあるのか

以下の節ではこの 3 つの観点を主たる考察対象とする。

4 OED3の用例から見る “A of B” 型感情メタファー表現 : **sorrow, grief, joy, delight, desire**

Omori (2008, 2012) では British National Corpus を用いて現代英国英語での英語感情名詞間のメタファーの構造的性を論じていたが、本節では歴史的系譜の論考のために英語史を鳥瞰できる *The Oxford English Dictionary* の第 2 版を基礎資料とし、改訂中の第 3 版 On-line 版で追加された用例 (OED3 online 2017.10.3) も加えた。OED における名詞 **fear** の全用例抽出とメタファー用法の分類論考をする前に、パイロットスタディとして、対立する感情を意味する 2 群の名詞 **joy, delight, sorrow, grief**、そして Omori によって **emotion** と近いと分析された **desire** が “A of B” 型のメタファー表現で使用されている用例を抽出して分類し、メタファーの特徴が伺えるかどうか確かめる。

of sorrow

1560 A. L. tr. *Calvin's Foure Serm. Songe Ezech. i.* I do nothing but sup up the **drink of sorrow**.

1583 Greene *Mamillia Wks.* (Grosart) II. 117 This new betrothed couple+are+soused in the **seas of sorrow**.

1588 Shakes. *L.L.L.* v. ii. 757 Since loues argument was first on foote, Let not the **cloud of sorrow** juttle it.

1601 *Song of Mary Djib*, If it may be, let this vnseasoned **cup of sorrow** passe.

1610 G. Fletcher *Christ's Vict.* in Farr *S.P. Jas.* I 57 Upon the roof the **bird of sorrow** sat, Elonging joyfull

day with her sad note.

1615 Hieron *Wks.* I. 438 Neither is every **myst of sorrow** dissolved into teares.

1649 T. Ford *Lusus Fort.* 46 Our life is chequerd with the whites of pleasure and delight, and the blacks of sorrow and pain.

c1665 Mrs. Hutchinson *Mem. Col. Hutchinson* (1846) 19 They may let loose the winds of passion to bring in a **flood of sorrow**.

1675 Cocker *Morals* 66 Wind-bound in the **port of Sorrow**.

c1679 *Roxb. Ball.* (1886) VI. 146 They dy'd in **Seas of sorrow** Drowned

1717 Pope *Iliad* ix. 559 Down his white beard a **stream of sorrow** flows.(=tear)

1725 Pope *Odyss.* x. 484 My sad companions on the beach I found, Their wistful eyes in **floods of sorrow** drown'd.

1757 W. Wilkie *Epigoniad* v. 154 A **flood of sorrow** started to his eyes.

1789 Burns *The Whistle* x, The board of Glenriddel, So noted for **drowning of sorrow** and care.

1791 Burke *App. Whigs* 6 Without any **shade of sorrow**.

1817 Coleridge *Lay Sermon*, 'Blessed are ye' 37 The **cup of sorrow** overflows by being held unsteadily.

名詞 sorrowのメタファーの特徴としては水の領域が多いことと、飲み物、飲み物を入れる容器が根源領域として目立つことである(1560 A. L. tr. *Calvin's Four Sermons on Songe Ezech. i.*, I do nothing but sup up the **drink of sorrow**). 悲しむ人が流す涙が川や雨、洪水に喩えられてきたことはよく知られている(1717 Pope *Iliad* ix. 559 Down his white beard a **stream of sorrow** flows.(=tear))。「悲しみ」sorrowだけでなく下で見るように、諸感情が容器に入れられた飲み物に喩えられるのは、旧約聖書詩編23番の「我が杯は溢れる」、新約聖書に見えるイエスのゲッセマナでの神への問いかけの言葉「この杯から飲まなければならないならば」の影響があるだろう。

Thou preparest a table before me in the presence of mine enemies: thou annointest my head with oil; my cup runneth over. (*Psalms* (AV) 23: 5)

O my Father, if this cup may not pass away from me, except I drink it, thy will be done.

(*The Gospel according to Matthew* (AV) 26: 42)

聖書での典型的人間のイメージは神に造られた器であり、神の怒りで打ち壊され、その恩寵が注ぎ込まれる酒杯である。転じて「運命を甘受する」という意味のメタファー表現「酒を飲み干す」が広まった。

対照的な感情が白黒の無彩色の対比で示された 1649 T. Ford *Lusus Fort.* 46 Our life is chequerd with the whites of pleasure and delight, and the blacks of sorrow and pain. も今後の時代別英詩コーパス資料検索に、色彩語と感情の対応というテーマを示唆するものである。

of grief

1700 Blackmore *Job* 98 Dismal **floods of grief** whelm o'er thy head.

1738 Wesley *Hymn*, 'The Voice of my Beloved' i, O'er Hills of Guilt and **Seas of Grief**, He leaps.

1753 Smollett *Ct. Fathom* xlv, While in this manner he secretly nursed the **worm of grief** that preyed upon his vitals.

1850 Tennyson *In Mem.* xxiv, And is it that the **haze of grief** Makes former gladness loom so great?

1875 I *Sketches New & Old* 213 A great **tidal wave of grief** swept over us all.

1889 V. McNabb *Let.* 24 Apr. in F. Valentine *Father Vincent McNabb* (1955) i. ii. 62 Every little **fountain of grief** seems stoned up.

1916 E. Pound *Lustra* 97 Since he died My wit and worth are cobwebs brushed aside In the full **flare of grief**.

「悲しみ」の意の類語 grief の“A of B”型用例は sorrow よりもずっと少なく7例であるが、floods, fountain, tidal wave, seas と噴出する水、海での押し寄せる波に典型的に喩えられていることが明らかだ。「霧」haze、「炎」flare、「虫」wormに喩えられた単独例はそれぞれ興味深いもので、Omoriの四大のカテゴリーの水と空気の双方に跨がるのが霧であろうし、「怒り」や「愛」の典型的根源領域の炎が「悲しみ」にも用いられていることは、「冷たい怒り」cold anger なる表現と対照をなしているように見える。「虫」が「悲しみの」表象になることは、日本語の「泣き

虫」「腹の虫」などの一連の表現との比較を誘う一方、感情メタファーの動物表象というカテゴリーの存在を示唆する。

of joy

1633 P. Fletcher *Purple Isl.* xii. xlvi, So spring some **dawns of joy**, so sets the **night of sorrow**.

c1645 Howell *Lett.* (1650) I. 135 There were **luminaries of joy** lately here for the victory that Don Gonzalez de Cordova got over Count Mansfelt in the Netherlands.

1647 Crashaw *Poems* (1652) 169 **Springs of joy** from whose all-cheering ray The fair stars fill their weakful fires.

a1649 Drummond of Hawthornden *Fam. Ep. Wks.* (1711) 156 Having to these **Seas of Joy** added this small Brook or Nymph of mine.

1655 W. Gurnall *Chr. in Arm.* i. x. §2 (1669) 56/1 Water to dash this strong **wine of joy**, and take away its headiness.

1670 Eachard *Cont. Clergy* 54 Sometimes he withdraws himself into the apogæum of doubt, sorrow, and despair; but then he comes again into the perigæum of joy, content, and assurance.

a1674 Clarendon *Relig. & Policy* (1711) I. vi. 314 Preparations...by the magistrates for making fires of **joy**.

1675 Traherne *Chr. Ethics* 415 Now all these **sparkles of joy** meet together in humility.

1684 Dineley *Dk. Beaufort's Progr. Wales* 154 A **fire of joy** called a Bonfire being part wood and part bones.

1702 Steele *Funeral* iv. i. 51 It Moderates the **Swell of Joy** that I am in, to think of your Difficulties.

a1711 Ken *Edmund Poet. Wks.* 1721 II. 167 The **Floods of Joy** celestial gently roll, Wave after Wave.

1719 De Foe *Crusoe* (1840) I. xviii. 327 The **flood of joy** in my breast.

1752 Johnson in John Taylor *Serm.* (1789) 224 The fear of death has always been considered as the embitterer of the **cup of joy**.

1755 *Man* No. 28. 6 Revelation represents the Most-High to us as the most beneficent **fountain of joy**.

1789 F. Burney *Diary* 3 Aug., They were received with the most violent **gusts of joy** and huzzas.

1801 Southey *Thalaba* vii. xvi, Belike he shall exchange its **cups of joy** For the unallayable bitterness of Zaccoum's fruit accurst.

1813 Shelley *Q. Mab* vi. 52 Until pure *health-drops, from the **cup of joy**, Fall like a dew of balm upon the world.

1816 J. Wilson *City of Plague* iii. ii, I drank the **cup of joy**.

1827 Keble *Chr. Year, St. Philip & St. James* 25 Youth's **lightning flash of joy** secure Pass'd seldom o'er His spright.

1842 J. W. Orderson *Creol.* xix. 228 His countenance was a **galaxy of joy**.

1846 *Sismondi's Lit. Europe* II. xxxviii. 520 To bathe and balsam in the **streams of joy**.

1852 Mrs. Stowe *Uncle Tom's C.* xxxiii, This question shot a **gleam of joy** and triumph through Tom's soul.

1854 Patmore *Angel in Ho.* xi. i, They made her face the jousting **field Of joy** and beautiful alarm.

1863 Monsell *Hymn, 'O worship the Lord'* iv, Mornings of **joy** for evenings of tearfulness.

1877 L. Morris *Epic Hades* ii. 82 A secret **spring of joy**, Which mocked the droughts of Fate.

1896 P. Brooks *New Starts in Life* xiv. 239 Shall life be one great deep **stream of joy**, ever and anon darkening and ensnarling itself in suffering?

(c. **fire of joy**: a bonfire; = feu de joie 1. 見出し語 feu de joie の定義文)

「悲しみ」のメタファー表現用例中に見えた“the whites of pleasure and delight, and the blacks of sorrow and pain”では、色彩語という同一領域の対照・反義表現がメタファー表現で対句をなしている例であったが、1670 Eachard *Cont. Clergy* 54 Sometimes he withdraws himself into the apogæum of doubt, sorrow, and despair; but then he comes again into the perigæum of joy, content, and assurance. では天文用語の apogæum 「遠地点」と perigæum 「近地点」がネガティブな感情とポジティブな感情のグループに対応して対句で用いられている。地球から見て同じ天体が遠く見える地点を対象との心理的距離の大きさ、つまり「疑い」「悲しみ」「絶望」にたとえ、心理的距離が近づくことを「喜び」「満足」「確信」に喩えているのだ。そして 1633 P. Fletcher *Purple Isl.* xii. xlvi, So spring some dawns of joy, so sets the night of sorrow. と 1863 Monsell *Hymn, 'O worship the Lord'* iv, Mornings of joy for evenings of tearfulness. の2例は、各感情と一日の時間帯がメタファー表現で構造

を成していることを示している。「喜び」は夜明け、朝で「悲しみ」は夜である。このことから四季と諸感情のメタファー的対応の存在も推定されるが、上に見える用例中の“spring(s) of joy”では「春」ではなく「泉」の意であった。また 1877 L. Morris *Epic Hades* ii. 82 A secret **spring of joy**, Which mocked the droughts of Fate. では前半だけ見ると「喜びの春」とも取れるが、後半の“the droughts of Fate”が「運命の干魘」と水が涸れた状態を示すメタファーとなっていることから、その反義の「湧き出る水」の意味だと確定できる。

その「泉」を含む水を根源領域とする喜びのメタファー用例が最も多く、抽出された27例中9例を数える (flood, fountain, seas, stream, swell)。中でも a1711 Ken Edmund Poet. Wks. 1721 II. 167 **The Floods of Joy** celestial gently roll, Wave after Wave. では、水の縁語が連続して喜びの気持ちが何度もこみ上げる様を描写している。

「悲しみ」の用例にはなかったもので「喜び」に顕著な根源領域は「光・炎」であり、6例見られた (fire, flash, galaxy, gleam, lightning, luminaries, sparkles)。中でも注目すべきは 1852 Mrs. Stowe *Uncle Tom's C.* xxxiii, This question shot a **gleam of joy and triumph** through Tom's soul. の『アンクルトムの小屋』からの例で、“a gleam of joy and triumph”と「勝利感と喜び」の混合感情が光の煌めき、そして胸を貫く弾丸で複合的に喩えられていることが意味深い。

of delight

1603 I *To his coy Love* i. Ibid. 78 These poore halfe Kisses kill me quite; Was euer man thus serued? Amidst an **Ocean of Delight**, For Pleasure to be sterued.

1625 W. Lisle *Du Bartas* i. 34 **Gardens of delight** Whose amell beds perfume the skie.

1640 T. Carew *Poems, To my Cousin* 2 Happy youth, that shalt possesse Such a **spring-tyde of delight**.

1648 J. Beaumont *Psyche* vi. ccxxiii, The rival Winds...rais'd a ruffling **tempest of Delight**.

1656 Cowley *Pindar. Odes, Extasie* vi, An unexhausted **Ocean of delight** Swallows my senses quite, And drowns all What, or How, or Where.

1793 Coleridge *Kisses* 1 Cupid, if storying Legends tell aright, Once fram'd a rich **Elixir of Delight**.

1804 Wordsw. *Poem*, She was a **Phantom of delight** When first she gleamed upon my sight.

1818 *Blackw. Mag.* III. 282 Lazy **streams of delight** from their blobber lips falling.

1884 J. Sharman *Hist. Swearing* iii. 39 The habit owes its **source of delight** to some soothing and pleasurable qualities.

1944 Blunden *Shells by Stream* 44 While some freed **fountain of delight** Played beauty ripple-fresh and bright.

1983 P. Ballard *Oasis of Delight* i. 28/2 The collection of ornamental trees had a large group of acers.

「喜び」joyの類語delightにも“A of B”型の用例が11個あるが、joyと同じく「水」の領域のメタファーが顕著で7例を占める (fountain, oasis, ocean 2x, source, spring-tide, stream)。「喜びの源」”source of delight”では既に水の問題は「死んだメタファー」だろう。「霊薬」elixirは液体か薬か分類不能、ワーズワースの有名な“**She was a Phantom of delight** When first she gleamed upon my sight.”で“a Phantom of delight”は後続動詞gleamedが光に喩えている。

of desire

c1400 Hylton *Scala Perf.* (W. de W. 1494) xxiv, Tyll thou be assaid and purifyed by the **fyre of desire** in devoute prayer.

1592 R. D. *Hypnerotomachia* 44 My venerious Lubric and incesing **spurre of desire**.

1711 Addison *Spect.* No. 261 36 When the first **Heats of Desire** are extinguished.

1931 R. Campbell *Georgiad* i. 18 His melancholy recipès [*sic*] For ‘happiness’. How to ‘rechauffe’ the **stock-pot of desire**.

「欲望」について抽出できた4例中3例は「炎・熱」の領域の語句で喩えられている。1931年の用例では感情が料理の領域にマッピングされており、「幸福感を得るための憂鬱な調理法」で「(冷めてしまったスープの)欲望を温め直す」という表現が面白い。

以上のパイロットスタディで、OEDをコーパスにして感情語のメタファー用例を抽出し、分類考察することは大変有効あり、以下の事実が確認された。各感情(語)のメタファー表現には用いられる根源領域に特徴があること、同一・類想のメタファー表現の通時的系譜が存在すること。

5 OED3 の “A of B” 型用例から見た fear のメタファー根源領域

検索語 “of fear” で示された 455 の見出し語中の引用例を全部調べた結果、まず書名でのこの型の使用が目立った。『恐怖の谷』『恐怖の王国』『恐怖の高速道路』等（カッコ内は個数）。

省庁	Graham Greene, <i>Ministry of Fear</i> (52); E. J. Epstein, <i>Agency of Fear</i> (1)
谷	Arthur Conan Doyle, <i>Valley of Fear</i> (60)
国	H. S. Thompson, <i>Kingdom of Fear</i> (11) M. Crichton, <i>State of Fear</i> (6); M. Du Plessis, <i>State of Fear</i> (2)
島	K. Mayo, <i>Isles of Fear</i> (3); F. Bream, <i>Island of Fear</i> (2)
都市	G. Frankau, <i>City of Fear</i> (4)
高速道路	D. Moore, <i>Haighway of Fear</i> (4)
家	M. J. Cawain, <i>House of Fear</i> (1)
輪	A. McCaffrey, <i>Ring of Fear</i> (6)
香り	M. Yorke, <i>Scent of Fear</i> (4)
断片	J. Bingham <i>Fragment of Fear</i> (3)
発汗	R. C. Dennis, <i>Sweat of Fear</i> (2)
糸	L. Griffin, <i>Thread of Fear</i> (1)
先端	C. Adair, <i>Edge of Fear</i> (1)

これらの多くは「恐怖の存在する場所」というカテゴリーにおける命名であるが、1993 *Guardian* 14 July 1/1 The debate about reforms by...the BBC's Director General, was reopened yesterday with a devastating criticism accusing him of creating an Orwellian **regime of fear and sycophancy**. [Orwellian] や1760 *Battle of Reviews* ix. 126 My Soul is sorrowful, that such long suffering Wights as you are...should at present be so much puzzled in the **Paths of Fear**. [path, discomfitingに同一箇所引用] などの用例と比べてみると、「恐怖による支配」「(人生を旅と捉えて) 恐怖の道に迷い込む」というようなメタファー的意味合いを持っているのかも知れない。その他、場所を表す語が根源領域となっているものに1810 Scott *Lady of Lake* vi. 269 And refluent through **the pass of fear** The battle's tide was pour'd [rhyme sword]. [pour], 1998 A. Cohen *Handle with Prayer* 76 Uplifting words and thoughts carry us from **the river bank of fear to** the bank of love. [bank], 1655 J. Goodwin *Mercy in her Exaltation* 29 There can be **no ground of fear** that he should cast them amongst the retyment and filth of the world, into the great sink, or common sewer of Hell. [retirement] (土地と理由の掛詞か) などが見られた。*Scent of Fear* の類似表現では 1998 *Advertiser* (Adelaide) (Nexis) 30 Sept. This kind of 'rationalisation' has **two strong odors** about it. One is the eager **whiff of anticipation** of continuing growth. The other is the **ordurous stink of fear** of oversupply. [ordurous] が感情語と匂いを対応させた興味深い例である。最終例の「先端」は、1987 *Observer* 8 Feb. 11/2 A mythology of Gambon stories keeps colleagues on **an edge of fear and pleasure** about what he might do next. [mythology] というサスペンス小説の読者の恐怖感と悦びの複合感情を意味する用例でも効果的に使われているが、これは本稿で注目する複合感情の例でもある。

以下では恐怖の表象として用いられた表現を類別に見ていく。

自然現象 自然現象では空気と水の両方にまたがる雲や霧が特徴的であるが、日照り一水の欠乏の例が1件見られたのが興味深い。水の流れも2件見られた。

雲 a1809 A. Seward *Poet. Wks* (1810) I. 27 Yet, yet my soul might better bear These absent weeks forlorn, Did not presaging **clouds of fear** Lour on thy wish'd return. [absent] 詩

霧 1801 R. Southey *Thalaba* I. iv. 203 Things viewed at distance thro' the **mist of fear**, In their distortion terrify and shock The abused sight. [abused] 詩

旋風 1906 J. Le Gallienne tr. P. Nansen *Love's Trilogy* 73 Every day drives me along in a **whirl of fear** and devil-me-carishness, heaven-blue joy, and black despair. [devil-may-carish]

霜 2004 K. Wilkins *Giants of Frost* xi. 122 A **frost of fear** stole over my skin. [frost]

干魃・日照り 1967 H. Nemerov *Blue Swallows in Coll. Poems* (1977) 380 **The flood of**

power and the drouth of fear: A mediocrity, or golden mean, Maybe at best the stoic *apatheia*. [mediocrity] drouth = drought 詩

気候 2015 *Toronto Star* (Nexis) 20 May a12 **A climate of fear** that leads to self-censorship, adding to **the veil of ignorance** behind which the government operates. [veil n]

潮流 1791 E. Burke *Let. to Member National Assembly* in *Wks.* (1823) VI. 12 **The shifting tides of fear and hope**. [shifting]

波 1991 N. Rush *Mating* vii. 452 He had to stop sending out waves of fear and supplication. [supplication]

動物 動物では「這うもの」が2例見られ、前節で確認された 1753 Smollett の “the **worm of grief**” と共通する。

毒蛇 1880 *Contemp. Rev.* Mar. 431 Hated with the adder-hate of fear. [adder] († **adder-hate** n. *Obs. (poet.)* hate considered as a poisonous or deadly emotion; intense hate.)

虫 1906 W. de la Mare *Poems* 84 I marvelled at...this poor creature..tettered with **worms of fear**. [tettered]

ここで *OED* の見出し語 *worm* を見れば語義 11. *fig. a.* “A grief or passion that preys stealthily on a man's heart or torments his conscience (like a worm in a dead body or a maggot in food); esp. the gnawing pain of remorse. Cf. cankermorm n. 2. Sometimes ‘the worm that never dies’ (as in 6b).” があり、その初例は古英詩 *Andreas* からの OE *Andreas* (1932) 769 **Brandhata** nið weoll on gewitte, weorm blædum fag, attor ælfæle. で「心の中の炎のごとく熱い憎しみ (**brandhata**) がたぎる、繁栄の敵の虫、猛毒が」と「憎しみ」が虫で表象されており、第2例は c1386 Chaucer *Doctor's Tale* 280 The worm of conscience. で、他にも *envy* の例があった。次いで *A Middle English Dictionary (MED)* を調べると、以下のように比喩義が三分類されていた。

MED worm 4. Fig.

(a) A worm as the type of that which is worthless, contemptible, vile, etc.; also, as an epithet for a person: miserable wretch;

(b) a worm as the type of that which stings or gnaws at the heart; **the ~ of conscience**, the pang of conscience, remorse;

(c) a worm as the type of that which insinuates itself into the heart and incites it to **sin** or **vice**, **dread**, etc.

つまり、“a worm of EMOTION” は諸感情の入れ替え可能な型として中世英語以来の伝統的なメタファー表現である。この表現形の系譜については、今後、英詩を資料とした独立論考で扱う。

身体不調 寒気 1793 C. Smith *Old Manor House* I. v. 111 I am sure, Bessy, we want something to keep **the cold of fear** out of *ours* [*sc.* our stomachs]. [cold]; 1996 M. Drabble *Witch of Exmoor* 179 Gogo, hearing this news, was struck with **a chill of fear**. It could not, nor it would not come to good. [good]

痙攣 1905 E. Wharton *House of Mirth* i. xiii. 240 She shook in the ague-fit of fear that was coming upon her! [ague]; 痙攣 1872 *Daily News* 28 Feb. The whole nation was hanging in a tensioned **spasm of fear**. [tention]; 2008 *Scotsman* (Nexis) 9 Feb. 36 The little **frisson of fear** that comes with reading of the bubbling vulcanism beneath Iceland's ice sheets. [vulcanism]

麻痺 1753 T. Smollett *Ferdinand Count Fathom* I. xiii. 74 Our adventurer, who overheard the conversation, was immediately seized with a palsy of fear. [palsy]

身体行為 叫び声 1850 L. A. Appleton *Misc. Poems* 13 Could shrieks of fear, and heaven directed eyes Avert the moment of the sacrifice? [heaven-directed]; 1733 W. Havard *Scanderberg* v. viii. 73 Who art thou, who with an Ague Hand Strikes trembling on the Coward Note of Fear? [note]

息 1747 W. Collins *Odes* 22 The Youths,...Like vernal Hyacinths in sullen Hue, At once **the Breath of Fear and Virtue** shedding. [vernal]

発汗 1973 R. C. Dennis *Sweat of Fear* xiii. 98 The police think it was a thrill murder. Do you feel such a person can be wholly sane? [thrill]; 1973 R. C. Dennis *Sweat of Fear* vii. 44 A room with wall-to-wall mattresses. Sprawled about were a half-dozen members of the tribe. [tribe]

複合感情 1663 W. Davenant *Siege of Rhodes: 2nd Pt.* iv. 40 **Amazement** is the uggli'st shape of **fear**. [ugly]
1723 R. Riccaltoun *Sober Enquiry Present Differences Church of Scotl.* ii. 83 It could not but infuse such a **Mixture of Fear into his Obedience**, that it becomes the predomining Principle. [predomine]
1791 E. Burke *Let. to Member National Assembly in Wks.* (1823) VI. 12 **The shifting tides of fear and hope**. [shifting]
1869 Trollope *He knew he was Right* I. xxxi. 241 [She] was in a twitter, **partly of expectation, and partly...of fear**. [twitter]
1943 *Jrnl. Abnormal & Social Psychol. Clin. Suppl.* 38 151 The immediate and desired objective of the scapegoaters was to relieve their **feelings of frustration, of fear** [etc.]. [scapegoat v]

「恐怖」 fear の意の類語 horror, terror では“A of B”型の例が一つずつあった。

of horror / terror

1835 Hogg in *Fraser's Mag.* XI. 359 The **pangs of terror** now needled his soul.

1761 *London & Environs* IV. 86 The great increase re-immersed the survivors into an **abyss of horror** and despair.

極度の恐怖の概念は猛獣（の牙）や底なし穴、地獄の底に喩えられており、dread でも抽出した4例の中に「猛獣の牙」が見えた。

1884 A. P. Hill *Tales Colorado Pioneers* lxiii. 307 Packer, the great American anthropophaginian, suffers **the pangs of dread** uncertainty in durance vile. [anthropophaginian]

1897 F. T. Bullen *Cruise 'Cachalot'* 178 I came butt up against something solid, the feel of which gathered all my scattered wits into a **compact knob of dread**. [knub]

2002 K. Novak *Ordinary Monsters* iii. i. 206 Joyce felt a **sobering ice bolt of dread**. Duncan? She picked up her pace and hurried toward town. [ice bolt]

(1830 J. H. Rickett *Eternity* ii. in *Sacred Minstrel* (ed. 2) 70 The devouring empyrosis, Impell'd by th'**arm of dread** Omnipotence, Dissolv'd the solid earth. [empyrosis])

その他、体にできた痲り(knub)、冷たい稲妻 (ice bolt)、最終例はdreadが形容詞の例であるが、大火＝恐怖がその腕で人を捕らえるという擬人化表現が参考になろう。

6 共起語から見たfearのメタファー

以上の節で得られた知見を基に、本節ではOED中の名詞 fear が現れる約3000の用例を共起語から幾つかのグループに分類した結果を述べる。擬人化と鳥のイメージが顕著であった。

擬人化

1599 Davies *Immort. Soul* xxii. vi. (1714) 79 **Trembling Fear**, and vexing Griefs annoy. (震える恐怖)

1777 Potter *Æschylus, Choephoræ* 323 Bitter constraint, and **spirit-sinking fear**. (魂をおぼれさせる恐怖)

1820 Keats *Hyperion* i. 37 There was a **listening fear** in her regard. (聞き耳を立てる恐怖)

1821 Clare *Vill. Minstr.* II. 103 They then, like school-boys that at truant play, In **sloomy fear** lounge on their homeward way. (うたたねする恐怖)

a1850 Rossetti *Dante & Circ.* i. (1874) 94 Gives me full oft a **fear that trembleth**: So that I call on Death. *Ibid.* 167 Ah! Ballad, unto thy dear offices I do commend my soul, thus trembling. (震える恐怖)

1854 *Fraser's Mag.* L. 355 A thing which causes our mind to trepitate with **quaking fear**. (震える恐怖)

1920 A. Huxley *Leda* 15 The sky Was full of strange tumult suddenly—Beating of mighty wings and shrill-voiced fear. (金切り声で叫ぶ恐怖)

1931 *Times Lit. Suppl.* 28 May 429/2 Soon he had brought a haunting fear to the minds of several people, turning upon the possession of an old bronze dancing Siva. (何度も現われる幽霊のような恐怖)

名詞 *fear* は典型的に震える (*tremble, quake*) 人に喩えられるが、これは第3節で見た *English Parnassus* にも *trembling, shuddering* があげられていたことから、伝統的メタファー措辞と言える。

動物比喩

1742 Gray *Eton* 62 These shall the fury Passions tear, **The vulturs of the mind**, Disdainful Anger, **pallid Fear**, And Shame.

1744 E. Moore *Fables* vi. 90 **Fear wings** his flight; the marsh he sought, The snuffing dogs are set at fault.

1847 Tennyson *Princess* iv. 359 **Fear...wing'd** Her transit to the throne, whereby she fell Delivering seal'd dispatches.

1842 S. Lover *Handy Andy* iii, How Andy runs! **Fear's** a fine spur. (馬と関係、恐怖が疾走する馬か、乗り手が恐怖か、混じっている)

1932 Kipling *Limits & Renewals* 47 A **Fear** leaped out of the goose-fleshed streets of London between the icy shop-fronts.

動物表象で *fear* ははっきりと鳥と結びついており、*English Parnassus* にあげられた *winged* は19世紀のTennysonにも引き継がれている。最終例の「恐怖が(羽毛で覆われたような)雪の積もる通りに、凍てつく店先に(鷲鳥のように)飛び出した」とは雪霜で凍てつく白さが水禽の羽毛に喩えられているのであるが、猛禽に喩えられた激しい感情としての第1例と対照をなす。その水鳥であるが、第2例では水場での狩猟、猟犬に追われる水禽が恐れて飛び立つ様子が描かれているのは示唆的だ。つまり、獲物を狙う猛禽は人に恐怖を与えるagentであり恐怖で飛んで逃げる獲物の鳥、こちらは恐怖に駆られた人の受動的な恐怖のメタファーとなっていると見られる。

Fearの色

1667 Milton *P.L.* vi. 393 The faint Satanic Host Defensive scarce, or, with pale fear surpris'd.

1742 Gray *Eton* 64 Pallid Fear, And Shame, that sculks behind. 青白い

1742 Gray *Eton* 62 These shall the fury Passions tear, The vulturs of the mind, Disdainful Anger, pallid Fear, And Shame.

1747 Upton *New Canto Spenser's F.Q.* xxvi, Guileful Dissimulation, and pale Fear, And Discord wood.

1763 Churchill *Ep. to Hogarth* Poems 1767 I. 111 Thy Drudge..Sicklies our hopes with the pale hue of Fear.

1782 J. Scott *Poet. Wks.* 235 Pale ear, who un-pursued still flies.

1794 Coleridge *Relig. Musings* 338 Pale Fear Haunted by ghastrlier shapings than surround Moon-blasted Madness when he yells at midnight!

1817 Coleridge *Poems* 69 Pale Fear Haunted by ghastrlier shapings.

1883 Stevenson in *Longm. Mag.* Apr. 683 The very name of Paris put her in a blue fear.

恐怖 *fear* の色は *English Parnassus* では *wanny, bloodless, pale-hearted, cream-fac't, blushing* と蒼白と赤面の両方があげられていたが、OEDの用例では *pale* が典型である。最終例 *blue fear* が日本人にとって興味深いのは、シロナガスクジラの英名が *blue whale* であることと関係する。

fearの温度

1592 W. Wyrley *Armorie, Capitall de Buz* 113 With chilling fear, the Ladies swapped downe, In deadly sownd.

1606 Sylvester *Du Bartas* ii. iv. i. *Tropheis* 136 A paire of busie chattering Pies, Seeing some hardie Tercell from the skies To stoop with rav'nous seres, feel a chill fear.

1606 Sylvester *Du Bartas* ii. iv. i. *Tropheis* 137 Even as a paire of busie chattering Pies..feel a chill fear, From bush to bush, wag-tayling here and there.

1670 Dryden *Conq. Granada* i. i, Ev'ry Lady's Blood with Fear was chill'd.

Odyss. xii. 435 A chilly fear congeal'd my vital blood.

- 1681 S. Colvil *Whigs Supplic.* (1751) 121 A gelid fear his heart possessed. (極寒の)
 1739 'R. Bull' tr. *Dedekindus' Grobianus* 260 A chilling Fear surprizes all his Joints, And makes him ready to untruss his Points.
 1791 E. Darwin *Bot. Gard.* i. 123 The demon..Springs o'er the *fear-froze crew with Harpy-claws.
 1841 W. Spalding *Italy & It. Isl.* I. 143 A chilly feeling in which for a time grief is kept aloof by fear.

恐怖の温度は冷たく、chill, chilly, frozen が典型である。

その他、単独例として fear が不老長寿薬、山びこ、川の流れ（に人を乗せる舟）に喩えられていた。下の第1例は4節で出た 1793 Coleridge *Kisses* 1 Cupid, if storying Legends tell aright, Once fram'd a rich **Elixir of Delight**. と比較すべき。つまり「顔色を変える歓び・恐怖」の意。

- 1635 Quarles *Embl.* iv. iv. (1718) 202 True **fear's** the Elixir, which in days of old Turn'd leaden crosses into crowns of gold. (恐怖は霊薬)
 1662 Dryden *Astræa Redux* 7 An horrid stillness first invades the ear, And in that silence we the tempest fear.
 1918 D. H. Lawrence *New Poems* 16 The after-echo of fear.
 1926 W. McDougall *Outl. Abnormal Psychol.* xviii. 316 If this accident had not taken place, the free-floating fear would have broken out in a phobia for some other object.
 1813 Scott *Trierm.* iii. xxiv, Foot of man..hath ne'er Dared to cross the Hall of **Fear**.関係ない？

7 OED3 の用例から見た hope の反義語としての fear

接続詞 and と or で結ばれて名詞 fear と共起する感情名詞を確認すると、以下のような数グループの存在が明らかになった（[] 内は用例が置かれた見出し語）。

hope and fear: 28 例 (1667, 1711, 1772 は同一例の別見出し語への引用)

- 1621 Burton *Anat. Mel.* i. ii. iii. x, Thus between **hope and fear**, suspicions, angers..we bangle away our best days.[第3版で削除]
 1637 Milton *Comus* 411 An equal poise of **hope and fear** Does arbitrate the event.
 1667 Dryden *Indian Emperour* ii. i. 17 I'm weary of this flesh which holds us here, And dastards manly Souls with hope and fear. [dustard] [manly]
 1675 A. Marvell *Poems Affairs State* (1697) I. 113 Man's life moves on the Poles of hope and fear. [pole]
 1687 G. Miege *Great French Dict.* ii. (at cited word) His mind sticks betwixt Hope and Fear. [stick]
 1711 M. Henry *Hope & Fear* Balanced 16 Then 'twill be Folly to curs [star] [unbalanced] 書名中
 1714 R. Fiddes *Pract. Disc.* (ed. 2) II. 380 Those mysticks who would discard the passions of hope and fear. [mystic]
 a1716 South *Serm.* (1716) IV. 196 **Hope and Fear** are the two great Handles, by which the Will of Man is to be taken Hold of. [第3版で削除]
 1719 J. Barker *Bosvil & Galesia* 58 My Mind labour'd under a perpetual shaking Palsy of **Hope and Fear**. [palsy]
 1759 Johnson *Prince of Abissinia* II. xxix. 34 The future [is the object] of **hope and fear**. [future]
 1772 *Test Filial Duty* II. 88 Unagitated by alternate **hope and fear**, the heart is quiet.[quiet] [unagitated]
 1781 Gibbon *Decline & Fall* III. 215 Agitated with **hope and fear**, for the success of the colours which they espoused. [colour]
 1788 V. Knox *Winter Evenings* xlv The alternate excitation of **hope and fear** is attended with considerable delight. [excitation]
 1797 *Encycl. Brit.* XIV. 2/1 The common division of the passions into *desire* and *aversion*, **hope and fear**, *joy* and *grief*, *love* and *hatred*, has been mentioned by every author who has treated of them. [passion]
 1802–12 Bentham *Ration. Judic. Evid.* (1827) V. 662 **Hope and fear**...run into one another and are undistinguishable.
 1809 S. T. Coleridge *Friend* 30 Nov. 231 The civilized man gives up those stimulants of **hope and fear** which constitute the chief charm of the savage life. [savage]
 1827 J. Bentham *Rationale Judicial Evid.* V. x. iv. 662 **Hope and fear**...run into one another and are undistinguishable. [undistinguishable]

1827 J. F. Cooper *Prairie* II. xiii. 217 His looks appeared to be strangely vacillating between **hope and fear**. [vascillate]
1834 in S. T. Coleridge *Shorter Wks. & Fragm.* (1995) II. ii. 1444 **Hope and Fear**...have slipt out their collars, and no longer run in couples...from the Kennel of my Psycho-somatic *Ology*. [psychosomatic]
1838 C. Thirlwall *Hist. Greece* V. xliii. 293 While the public mind was thus suspended between **hope and fear**. [hope]
1849 Macaulay *Hist. Eng.* I. v. 662 Both were impelled by the strongest pressure of **hope and fear** to criminate him. [strong]
1850 J. McCosh *Method Divine Govt.* (ed. 2) ii. ii. 217 The superstitious man vacillates...between **hope and fear**, between self-confidence and despondency. [vascillate]
1868 W. Morris *Earthly Paradise* i. 254 In that wan place **desert of hope and fear**. [desert]
1869 W. E. H. Lecky *Hist. European Morals* I. iii. 414 It struck alike the coarsest chords of **hope and fear**, and the finest chords of compassion. [chord]
1884 W. H. Harris *Honey-bee* 271 Apiculturists, like agriculturists, are subject to many and great alternations of **hope and fear**. [agriculturist]
1902 W. Watson *Coron. K. Edw. VII* iii, And changelessly the river sends his sigh Down leagues of **hope and fear**. [第3版で削除]
1967 Ngũgĩ wa Thiong'o *Grain of Wheat* v. 65 His heart livened with **hope and fear** as he went into the bathroom to prepare himself for the great confession. [liven]
1973 *Times Lit. Suppl.* 8 June 631/3 The Kennedy years..launched the Americans on a jag of **hope and fear**. [jag] 「ひとしきりの飲食・一時的興奮」から「酩酊・多量の酒」の意味である。
(1871 R. W. Dale *Commandm.* x. 257 It was God who made us susceptible to **hope and to fear**. 動詞)

この28例で興味深いものを見るならば、第1にブリタニカ百科事典の *passion* の項からの引用 (1797 *Encycl. Brit.* XIV. 2/1 The common division of the passions into *desire* and *aversion*, *hope* and *fear*, *joy* and *grief*, *love* and *hatred*, has been mentioned by every author who has treated of them. [passion]) である。ここでは「感情」を意味する *passion* がまだ用いられていることから、現行の *emotion* が代表的名詞になったのは19世紀以降であると知れる。1714年の引用例中にも “the passions of hope and fear” という同格連語形が見える。そして18世紀末の時点で主要感情とみなされていたのが8個であり、それぞれ *and* で結ばれた対義語とペアで捉えられていることが重要だ。

この反義・対義の関係が *between* を用いて強調されているのが **1621** Burton *Anat. Mel.* i. ii. iii. x, Thus between **hope and fear**, suspicions, angers..we bangle away our best days. および古形 *betwixt* が使われた **1687** G. Miege *Great French Dict.* ii. (at cited word) His mind sticks betwixt Hope and Fear. [stick] である。見落としてならないのは見出し語 *vascillate* (2. a. To alternate or waver between different opinions or courses of action.) の語義 2. a. への最終例の2例である (1827 J. F. Cooper *Prairie* II. xiii. 217 His looks appeared to be strangely vacillating between hope and fear. 1850 J. McCosh *Method Divine Govt.* (ed. 2) ii. ii. 217 The superstitious man vacillates..between hope and fear, between self-confidence and despondency.)。これらでは、振り子が揺れるように両端、対極を意味して “between A and B” の型に生じている。両極とはっきり書かれているのは **1675** A. Marvell *Poems Affairs State* (1697) I. 113 Man's life moves on the Poles of hope and fear. [pole] で、形而上詩人として名高いマーヴェルは「人生は希望と恐怖の両極で揺れ動く」と述べているのだ。

メタファーの根源領域として興味深いのは **1868** W. Morris *Earthly Paradise* i. 254 In that wan place **desert of hope and fear**. [desert] で、希望と恐怖のあり場所を砂漠とまとめているが、Omori (2008) によれば砂漠は *grief* の根源領域である。

hope or fear: 3例

1656 Osborne *Adv. Son* v. §26 (1896) 124 Do not pre-engage **Hope or Fear** by a tedious expectation.
1878 W. E. H. Lecky *Hist. Eng. 18th Cent.* II. ix. 540 The evil of all attempts to deflect the judgment by **hope or fear**. [deflect]
1897 B. Stoker *Dracula* viii. 92 At the edge of the West Cliff above the pier I looked across the harbour to the East Cliff, in the **hope or fear**...of seeing Lucy. [pier]
(1775 Wesley *Calm Address* 12, I am unbiassed: I have nothing to hope or fear from either side. 動詞)

等位接続詞 *or* で結ばれた用例は少ないが、動詞の例も見えた。

fear and hope: 2例

1757 W. Wilkie *Epigoniad* vii. 192 Amaz'd we stood; in silence, each his mind To **fear and hope** alternately resign'd. [silence]

1791 E. Burke *Let. to Member National Assembly in Wks.* (1823) VI. 12 The shifting tides of **fear and hope**. [shifting]

対句の要素の順序が入れ替わるとやはり用例は少なくなる。これは“hope and fear”がフレーズとして固定表現 (irreversible binominal) となっている可能性を示している。比喩として面白いのは“The shifting tides of fear and hope”と潮の満ち引き (四大の内の水) に恐怖と希望が喩えられている第2例である。

Fear or hope: 1例

1670 Milton *Hist. Eng.* vi. (1851) 262 For **fear or hope** of reward they attested what was not true. []

(1716 Collier on *Chas. V*, III. vii.62 The Landgrave...wrote to Granvelle...begging an explicit declaration of what they had to fear or hope. [] 動詞)

上と同じく *or* で結ばれたのは1例のみ。ここまでの用例考察から *fear* は *hope* と対義関係にあると英語の歴史上長く見なされてきたようだが、その *hope* と対義関係で用いられる感情名詞は *fear* 以外にあるだろうか。検索式を“hope and”にして検索すると以下の3例が抽出された。

hope and despair: 3例

1820 C. R. Maturin *Melmoth* II. vii. 125 I approached the door, of which **hope and despair** seemed to stand the alternate portresses. [portress]

1953 K. Raine *Coll. Poems* (1956) 166 Ceasing to trouble the flowing of things with the fleeting **Dream and hope and despair** of this transient perilous selving. [selve] 3項で

1999 R. I. Simon et al. *Between Hope & Despair* 1 Those of us who spend considerable time pursuing questions of the remembrance of specific acts of mass violence. [remembrance] 書名

名詞 *despair* が *hope* の第2の対義語である。ちなみに *hope or despair*, *despair and hope*, *despair and fear*, *despair or fear* の用例はなかった。その他 *fear* の対義語として用いられた名詞には *love*, *joy*, *pleasure*, *glee*, *desire* が3例から1例見えた。

1676 Hale *Contempl.* ii. 212 Thou...may'st most justly expect from the children of Men our uttermost **Love, and Fear**.

1679 T. Siden *Hist. Sevarites* 95 We began to hang between **fear and pleasure**.

1685 Baxter *Paraphr. N.T.* Matt. xxv. 7 Self-love, and fear, will make them cry for Mercy, with some kind of Repentance, though they be unconverted.

1698 J. Fraser *Mem.* (1738) vii. 239 Tho' in my sensitive Faculty I find not these Impressions of **Joy and Fear**, yet do I find them in my estimative appreciative Faculty.

1758 Johnson *Idler* No. 6 310 The true causes of her speed were **fear and love**.

1770 J. Love *Cricket* 5 Where, much divided between **Fear and Glee**, The Youth cries Rub; O Flee, you Ling'rer, Flee!

1814 Scott *Ld. of Isles* vi. xxxvi, He..greeted him 'twixt **joy and fear**, As being of superior sphere.

(1660 *Andromania* i. i. in Hazl. *Dodsley* XIV. 200 See the ambassadors entertain'd With such an evenness as should be us'd to men We neither fear nor love. 動詞)

(1700 in *Cath. Rec. Soc. Publ.* (1911) IX. 336 She was both loved & fear'd by those yt had ye happines to be under her conduct. 動詞)

(1756 C. Smart tr. *Horace, Epist.* i. ii. (1826) II. 191 To him, that is a slave to desire or to fear, house and estate do just as much good as paintings to a sore-eyed person. 動詞)

8 まとめ OED用例で判明した感情名詞 **fear** についての事実

OED に見える引用例文中の約3000個の名詞 **fear** の共起語の観察から以下の英語史的事実がわかった。名詞 **fear** が表す「恐怖」の概念は、恐怖を感じて叫び、震え、顔色を変える人に喩えられ、動物では鳥に喩える詩語の伝統がある。虫 **worm** も歴史的に **fear** との結びつきがある。自然現象では空気と水の領域が交わるところ、雲、霧、靄などが「心が晴れない」恐怖のメタファーとして顕著であり、断崖絶壁など実際に人が身の危険を感じるような場所、地の領域もあった。

温度語彙では「冷感」、対立感情語は圧倒的に **hope** である。その **hope** が光と朝に譬えられるのと対照的に “in fear and darkness” “night of fear” という対句が示すように、**fear** は **sorrow** とともに夜に譬えられている。これから一日の時間帯と各感情語の対応の存在が予見される。昼は **joy, pleasure**、夕刻・黄昏は **grief, ennui** などと対応して構造を成しているのではないか。

分析論考の過程で複合感情 (**blends of emotion**) という研究テーマを得て、名詞 **fear** と等位接続詞で繋がれた類語の用例も収集したが、用例数が多く、本稿では論じる紙数の余裕がなかった。これは次稿で扱い、**Shakespeare, Sonnets** における対義・類義感情語の使用に結びつけたい。また感情を表すメタファー表象としての虫と鳥の類語群については、それぞれ別稿で歴史的系譜を英詩の用例から探る。

参考文献

- Cruse, D. A., 1986. *Lexical Semantics*. Cambridge University Press.
- Darwin, Charles, 1872. *The Expression of THE EMOTIONS IN MAN AND ANIMALS*. LONDON: JOHN MURRAY, ALBEMARLE STREET.
- Ekman, Paul, 1992. "Are There Basic Emotions?" *Psychological Review* 99, 3: 550-53.
- Ekman, Paul, 1992. "An Argument for Basic Emotions" *Cognition and Emotion* 6, 3/4: 169-200.
- Evans, Dylan, 2003. *Emotion: A Very Short Introduction*. Oxford University Press.
- Geeraerts, Dirk, 2010. *Theories of Lexical Semantics*. Oxford: Oxford University Press.
- Izdebska, Daria, 2016. "The Curious Case of *TORN*: The Importance of Lexical-Semantic Approaches to the Study of Emotions in Old English," in Jorgensen and Wilcox eds. 2016: 53-74.
- Jones, Steve, Paradis, Carita, Murphy, M. Lynn, and Willner, Caroline, 2007. "Googling for 'opposites' a web-based study of antonym canonicity" *Corpora*. 2, 2: 129-155. Edinburgh University Press
- Jorgensen A., MacCormack, F. and Wilcox J. eds. 2016. *Anglo-Saxon Emotions: Reading the Heart in Old English Language, Literature and Culture*. Routledge.
- Kay, Christian, and Allan, Kathryn, 2015. *English Historical Semantics*. Edinburgh University Press.
- Kövesces, Zoltán, 2012. *Emotion Concepts*. Springer Science & Business Media.
- Kövesces, Zoltán, 2015. "Happiness in Context" in *Metaphor and Culture*.
- Lewis, Michael, and Haviland-Jones, Jeannette M., eds., 2000. *Handbook of Emotions*. New York: Guilford Press.
- Moon, Rosamund, 1998. *Fixed Expressions and Idioms in English*. Oxford: Oxford University Press.
- Omori Ayako, 2008. "Emotion as huge mass of moving water" *Metaphor and Symbol* 23, 2: 130-146.
- Omori Ayako, 2012. "Conventional Metaphors for Antonymous Emotion Concepts" in Paul Wilson (ed.): *Dynamicity in emotion concepts*, Frankfurt a. M.: Peter Lang, 183-204.
- Omori Ayako, 2015. *Metaphor of Emotions in English with Special Reference to the Natural World and the Animal Kingdom as their source Domains*. Tokyo: Hitsuji Shobo.
- Ortony, Andrew and Turner, Terence J., 1990. "What's Basic about Basic Emotions" *Psychological Review* 97, 3: 315-31.
- Paradis, Carita, Willners, Caroline and Jones, Steve, 2009. "Good and Bad Opposites" *The Mental Lexicon* 4, 3:380-429.
- Plutchik, Robert, 1984. "Emotions: A General Psychoevolutionary Theory" in *Approaches to Emotion*. Eds. By K. R. Schere and P. Ekman. Hillsdale, N.J: Erlbaum.
- Plutchik, Robert, 2002. *Emotions and Life: Perspectives from Psychology, Biology, and Evolution*. Washington D. C.: American Psychological Association.
- Poole, Joshua, 1657. *English Parnassus*. Menston: The Scholar Press Limited. (1972)
- Sandford, Jodi L., 2014. "Turn a colour with emotion: a linguistic construction of colour in English," *Journal of the International Colour Association*. 13: 67-83.
- Watanabe Hideki, 1993. "Some Neglected Aspects of Meaning of the Old English Noun-Verb Combination *egesa stod*," *Studies in Medieval English Language and Literature* 8: 25-37. The Japan Society for Medieval English Studies: Tokyo.
- Watanabe, Hideki, 1998, Review of *A Thesaurus of Old English*. *Studies in English Literature*. English Number 132-8. The English Literary Society of Japan: Tokyo.
- Watanabe, Hideki, 2002, "*A Thesaurus of Old English Revisited*" *Lexicographica Series Maior* 109: 313-24. Max Niemeyer, Tübingen.
- Watanabe, Hideki, 2004, *Metaphoric and Formulaic Expressions in Old English Reconsidered*. Tokyo: Eihosha.
- Wierzbicka, Anna, 1986. "Human Emotions: Universal or Culture-Specific?" *American Anthropologist, New Series* 88, 3: 584-94.
- 九鬼周造 1930. 『いきの構造』東京：岩波書店。(図表なし)
- 九鬼周造 1979. 「いきの構造」『いきの構造』(岩波文庫)東京：岩波書店。(図表あり)
- 九鬼周造 「情緒の系譜」『いきの構造』(岩波文庫)東京：岩波書店。(図表あり)
- 清水真木 2014. 『感情とは何か—プラトンからアーレントまで』ちくま新書 東京：筑摩書房.
- 渡辺秀樹 1994 「同意語並列構文の系譜」『英語青年』東京：研究社. 140, 6:17-19.
- 渡辺秀樹 「シェイクスピアによる賞賛と罵倒のレトリック 動物名人間比喻用法の対義類義の構造」『文化とレトリック認識 言語文化共同研究プロジェクト 2010』大森文子編 大阪大学大学院言語文化研究科. 1-20.